

# 日本フィル「被災地に音楽を」

## 訪問コンサート レポート 第37号

被災地支援の訪問演奏は、2011年4月から2016年11月末までで通算202回となりました。



石巻「川の上・百俵館」でのコンサートの様子



時計は語る。津波がおしよせた3時27分に止まった南三陸病院の内科外来の時計

■「被災地に音楽を」に感激  
 加藤美津男 63歳  
 (一関市・元小学校教員)  
 10月28日、宮城県南三陸町で30年ぶりに同級生4人と再会を果たした。翌日、石巻市在住の友人の案内で東日本大震災被災地を巡りました。  
 石巻市雄勝町の「オーリングハウス」で休憩を取りました。被災した雄勝町の「ミニシアター再生を目標として建てられた交流施設です。置いてあったチラシを手にとり、その後、日本フィルハーモニー交響楽団の有志による「弦楽四重奏」が開催される運び、心算ができました。  
 11月1日、92歳の母を平一関市から車で2時間かけて再訪しました。小さな建物の中に、地域の方々が50人ほど集まりました。曲  
 巨匠バルザイクの「四季」や「見上げよ」の夜の星を「なな10曲。地域の方々に交じって、美しい音色で耳を傾けました。  
 震災後、日本フィルは市民や企業からの支援をもとにボランティア活動「被災地に音楽を」を開始し、その日は約1,000回目の公演でした。  
 平井俊郎団長の「これからも音楽を通じて被災地に思いを届けた」というあじわいの感動でした。こうした地道な風の長い活動が復興の後押しになることを願っています。

### 訪問地

河北新報 2016年12月11日12日掲載  
 コンサートに来場された方から寄せられました

- 2016年10月31日 宮城県 南三陸町  
 南三陸病院／特別養護老人ホーム慈恵園
- 11月1日 宮城県 石巻市  
 おがっ 雄勝オーリングハウス／川の上・ひやっぴょうかん 百俵館
- 11月2日 ころぷのお家いしのまき

### 訪問メンバー

- ヴァイオリン 神尾 あずさ 平井 幸子
- ヴィオラ 中川 裕美子
- チェロ 大澤 哲弥



## 10月31日 あたたかな心が満ちた会場——南三陸病院、慈恵園でのコンサート

一行がはじめに訪れたのは南三陸病院。この病院は震災後に集められた寄付により再建されたものです。もともとは津波の被害のあったエリアに建っていましたが、震災後高台に新たに建てられました。院内には津波によって止まってしまった時計が展示されており、震災の爪痕が生々しく感じられます。

コンサートは病院中央の吹き抜けで行われました。クラシックから民謡、アンコールには・・・弦楽四重奏版のラジオ体操を演奏！来場者・スタッフも一緒に体を動かし、笑顔と元気のあふれるコンサートになりました。



南三陸病院でのコンサートの様子



慈恵園でのコンサートの様子。楽員がトークを交えながらなごやかに進行します

続いて訪れたのは、高齢者施設の慈恵園。こちらでは入居されている40名ほどの方々が民謡に併せて歌ってくださり、演奏した楽員もスタッフも皆さんのあたたかさに感動しました。

## 11月1日 あれから5年——雄勝オーリンクハウス、百俵館

記憶をさかのぼること約5年半前、震災直後の2011年5月9日に日本フィルは石巻に音楽を届けにやって来ました。避難所におそろおそろお邪魔すると、じっと音楽に耳を傾けてくれる人たちがいて安心した記憶があります。自衛隊が炊き出しをされていて、全国からはボランティアが泊まり込みで応援していました。



2011年当時の訪問演奏の様子。左写真中央にはヴァイオリン松本の姿が見えます

あれから5年がたち、福島、宮城、岩手の被災地に音楽を届ける活動を続けてきて、この日200回目を石巻雄勝地区のオーリンクハウスで行うことができました。15mの津波が押し寄せ、全くひと気のなくなった湾の端っこにポツンとたっている素敵なカフェに、50人の人たちが車でやって来ました。地域のみなさんの心の拠り所に音楽が流れて、いい時間になりました。

その後、あの悲劇の大川小学校を訪れ、メンバーみんなで手を合わせました。お母さん楽員3人、これからお父さんになる楽員1名、それぞれの深い思いが交差しました。



夜は北上川の沿岸にある集落、川の上・百俵館でコンサート。古い精米蔵をリノベーションした建物は、暖かくて心休まるモダンな空間で、演奏者も集まる人々も、音楽が結ぶ奇跡みたいな時間を期待してウキウキしていました。予想通り、家中の椅子をかき集めても足りないほどの多くのお客様が来場。201回目のコンサートもここにいるみんなが幸せを感じるひと時でした。

## 11月2日

最終日は、コープのお家いしのまきでのコンサート。震災後、4回目の訪問です。この日も大勢のお客さまにご来場いただきました。近隣には今も仮設住宅が建ち並んでいて、多くの方が暮らしています。ラデツキー行進曲では来場者の皆さまが大きな手拍子で参加してくださいました。

6年間で200回を数えた「被災地に音楽を」。この間、音楽で心の通う瞬間が数多くあり、私たちは音楽の持つ不思議な力を再確認することができました。しかし、現在なお被災地では地域ごとに異なる問題を抱えており、一口に語ることのできない難しい状況であることも事実です。そうした中、私たちはこれからも音楽家にできることは何かを自らに問いかけながら、この活動を地道に続けていきたいと考えています。



明るい雰囲気の中会場にたくさんの方にお集まりいただきました



200回を迎えることになった11月1日のコンサートについては、同行いただいた記者の飛田恵美子さんのレポートをお届けします。

「みなさんの中に、今日が誕生日の人はいますか？」  
——ヴァイオリン奏者・神尾あずさんの問いかけに、聴衆の中からそろそろと手が挙がった。弦楽四重奏のメンバーが微笑みながら弓を構える。「Happy Birthday to You」の優しい旋律と歌声が、海沿いの小さな集会所を満たしていく。

日本フィルハーモニー交響楽団が東日本大震災後に始めた「被災地に音楽を」コンサートが200回目を迎えると聞き、ツアーに同行させていただいた。「被災地に音楽を」は、有志の楽団員が被災地を訪れ、避難所や仮設住宅、地域のコミュニティスペースなどを舞台にコンサートを開くプログラムだ。

今回の奏者は、ヴァイオリンの神尾あずさん、平井幸子さん、ヴィオラの中川裕美子さん、チェロの大澤哲弥さんの4人。クラシックの定番曲はもちろん、東北の民謡「さんさ時雨」に「会津磐梯山」、日本の四季メドレー、「見上げてごらん夜空の星を」「上を向いて歩こう」といった歌謡曲まで披露する。

観客席に目を向けると、ある人は口元に笑みを浮かべながら目を閉じ、ある人はリズムに合わせて体を揺らし、じっくりと聴き入っていた。思い浮かべているのは、こどもの頃に遊んだ山や水辺の景色だろうか。馴染み深いメロディに、自然とハミングや歌声がこぼれはじめ、弦楽四重奏の調べと重なっていく。冒頭で挙げたように、誕生日の人を全員で祝う場面もあった。奏者と観客の距離が近く、大ホールで開かれるコンサートの荘厳さとはまた違った、温かく親密な空気が流れていた。



200回目のコンサートは石巻市雄勝町「オーリンクハウス」で開かれた



70名弱が訪れた石巻「川の上・百俵館」でのコンサート



「みなさん、ヴァイオリンとヴィオラの違いがわかりますか？」と、楽器を掲げ紹介する一場面も

震災直後、被災地に音楽を届ける活動はほかにも多数あったが、時間が経つにつれて徐々に姿を消していった。5年半が経ったいまでも継続しているのは、ましてや200回という数のコンサートを開いてきたのは日本フィルだけだろう。いまの東北において、「被災地に音楽を」はどんな意味合いを持つのだろうか。地元の人に感想を聞いた。

「何もかも失った震災直後に比べて、物質的には豊かになりました。でも、町の復旧工事は遅れているし、多くの人が“これからどうなるんだろう”という不安を抱えています。そうした中で、素晴らしい演奏に心が癒され豊かになったような気がします。明日からまた頑張るための力をいただきました」。



「家を建て、仮設住宅を出る人が増えてきました。それは喜ばしいことである一方で、この数年で築いてきたコミュニティが再びバラバラになることを意味します。こうしてみんなで集まって同じ体験をすることは、私たちにとってとても意味のあることなんです」。

被災の度合いや進捗状況は、地域によって、人によって、大きな差がある。これからの地域に望むものも人によって違うだろう。被災地はいま、震災直後とはまた違った繊細な課題を抱えている。



会場全体でバースデーソングを歌う様子

東北への取材を重ねる中でしみじみと感じてきたのは、言葉は人を繋いだり救ったりする一方で、意図せず傷つけたり余計な不和を生んだりすることもある、ということだ。外から来た人が発した「頑張って」という励ましの声が、被災した人々の耳にどこか他人事のように響く。「いつまでもくよくよしているわけにはいかない」という町の人々の力強い発言が、まだ前を向けずにいる人を傷つける。本当に届けたい気持ちを伝えるには、言葉は不完全な道具なのかもしれない。

音楽のすごいところは、そうした言葉の壁を軽々と越えてしまうところだ。相手を労り慰める気持ち、「一緒に頑張っていこう」という気持ちが、混じり気なくそのまま伝わる。言葉のない音楽だからこそ素直に受け入れることができた、気持ちが軽くなった、という人も多いのではないだろうか。

それを証明するように、演奏を聴き終えた人たちは皆、心の中のコップになみなみと水を注がれたような、大事な贈り物もらったような、満たされた表情を浮かべていた。ご近所さん同士、「いい音楽でしたね」と笑顔で声をかけ合う。「忘れられない誕生日になりました」と、誕生日を祝われた人が瞳を輝かせていた。

個人的な感想を言うと、その日は一日中、優しいメロディが頭の中でリフレインして、体が弾むように気分が良かった。あの場にいたほかの人たちも同じ心地良さを感じていたらいいと思う。



コンサート終了後、地元の人と進行を深める楽団員たち

強張っていた心を柔らかく解きほぐし、気持ちを上向きにする力。同じ場を共有した人同士に不思議な連帯感を芽生えさせ、隣の人を愛おしく思わせてしまう力。音楽の持つそうした力は、新たな局面を迎えたいいまの被災地にこそ必要とされているのかもしれない。

#### <プロフィール>

飛田 恵美子(ひだ えみこ)

フリーライター。東北の復興ものづくりを紹介するウェブマガジン「東北マニユファクチュール・ストーリー」を、時計メーカー「ジラルール・ペルゴ」、牡鹿半島で被災した女性たちの仕事づくりを行う「一般社団法人つむぎや」と共に運営。これまでに70を超える東北の現場取材してきた。